

鶯 娘

宝曆十二年四月

作詞 不詳

作曲 富士田吉治 杵屋忠次郎

(鼓唄・三下乡)

妄執の雲晴れやらぬ朧夜の恋に迷いし我が心

忍山 口舌の種の恋風が吹けども傘に雪もつて

積もる思ひは泡雪の消えてはかなき恋路とや

思い重なる胸の闇

せめてあはれと夕ぐれに

ちらちら雪に濡鶯の しょんぼりと可愛らし

迷ふ心の細流れ ちよろちよろ水の一筋に

恨みの外は白鶯の水になれたる足どりも

濡れて傘と消ゆるもの

我は泪に乾く間も 袖干しあえぬ月影に

忍ぶその夜の話を捨てて

縁を結ぶの神さんを うらみて初手はついひざりごと

届かぬ思ひ浮名立つ

ほんに涙の氷柱さえ 解けて逢瀬の嬉しさも

余る色香の恥ずかしや

須磨の浦辺で汐汲むよりも 君の心は汲みにくい

さりとは実に誠と思はんせ

縷子の袴の裳とるよりも 主の心が取りにくい

さりとは実に誠と思はんせ

しやほんにえ

白鶯の羽風に雪の散りて 花の散り敷く景色と見れど

あたら眺めの雪ぞ 散りなん雪ぞ 散りなん憎からぬ

(鼓唄)

恋に心も移ろひし

花の吹雪の散りかかり 払ふも惜しき袖傘や

傘をや傘を さすならば てんでん 日照傘

それえそれえ さしかけて いざさらば

花見にごんせ吉野山

それえそれえ 白ひ桜の花笠

縁と月日の廻りくるくる車笠

それそれそれ さうじゃえそれが浮名の端となる

添ふも添はれず あまつさえ

邪慳の刃に先立ちて この世からさえ剣の山

一樹の内に恐ろしや地獄のありさま

ことごとく罪を糺して閻王の

鉄杖まきにありありと

等活 畜生 衆生地獄

あるいは叫喚 大叫喚

修羅の太鼓は隙もなく

獄卒四方に群がりて 鉄杖振り上げ鉄の

牙噛み鳴らし ぼつ立て ぼつ立て

二六時中がその間

くるりくるり 追ひ廻り 追ひ廻り

終にこの身は ひしひしひし

憐れみたまえ 我が憂身

語るも 泪なりけらし

(姿は消えて失せにけり)

